

閉会の辞

国際センター長、社会学部教授
黄 盛彬 氏



○**小林** それでは、これより閉会のご挨拶に移ります。閉会のご挨拶は国際センター長、社会学部教授の黄盛彬先生よりちょうだいいたします。黄先生、よろしく願いいたします。

○**黄** 今回それぞれの学部に取り組みについて知ることができ、大変勉強になりました。

私自身が留学生でしたので、この多様な日本語力という意味では、私も昔のことを思い出しました。日本語を全く学ばなかった大学院生の1年のときに、立教大学に行きなさいということと言われて、6カ月後に立教大学に参りました。それでその6カ月後に大学院の正規課程の試験を受けることになりました。実は、今まで日本語能力試験も受けていないので、N1すら持っていません。家族で、日本語能力試験の合格証を持っていない人は、私と三女だけになりました。

そこで、どのように日本語を学んでいたかですが、立教での留学生時代を思いだすと、素晴らしい日本語プログラムや先生方の指導を受けることができました。それから、当時、毎週火曜日だったと記憶していますが、昼休みにご飯を一緒に食べるという留学生サポートクラブのようなものがあって、そこで友達ことができました。立教の職員になっている方もいらっしゃるのですが、そこでのおつき合いが日本社会への適応と日本語力の向上に大きく役立ちました。あと、当時からチューター制度というのがありまして、指導教授の服部孝章先生（社会学部名誉教授）が紹介してくださった大阪出身の村田君という人が私のチューターでした。彼とは友達になり、一緒に遊んでいるうちに、また日本語力が伸びて行きました。現在は、こうやって日本語で仕事をするということになっているので、当時の立

教大学における日本語教育と、それを支える「エクストラカリキュラム」としてのサークルやピアエデュケーションの制度と文化には深く感謝しております。それがあつた種の大学の力なのかなと考へております。なので多様な日本語力という課題をどう捉へるかということですが、何か受け入れ側の力というものが問われるのかなという気はいたします。

もう一つ、今日お話を伺いながら、ちょっといろいろ調べてみたら、世界のトレンドを比較するのはなかなか難しいと思ふんですね。グローバル化という流れから考へると、留学生の流れというもの、まず英語圏へという流れがあり、あとは文化言語的な近さということで流れがあると思ふんです。日本はかつての帝国の経験があるので、しばらくの間はポストコロナというフローが見られていたと思ふんですね。韓国の留学生が多かつたというようなことも、ある種のポストコロナなフローと見ることもできると思ひます。近年は中国からの留学生が多いというフローをどうとらへるかというのは難しいですが、留学生を拡大させるという点においては、非英語圏の国としての日本は、大変難しい、不利な状況はあるんですね。

韓国と日本はある意味共通しています。韓国は今、留学生が14万人程度、日本は30万人程度ということですが、日本の特徴というのは日本語学校生が約9万人以上、専門学校生が約5万人以上いるので、30万人のうち、実は大学の正規課程の留学生の数はそれほど多くはないということですね。正規課程の留学生はまだ17万ぐらいでしょうか。韓国のほうは留学生が、2005年ごろの段階ですと2万人もいなかったのですが、今は14万人になりまして、その14万人のうち、8万、ほぼ9万人ぐらいが正規課程なので、9万対17万ということなので、割合で言うと、やや韓国のほうが多いかなと思ひます。

ところが、韓国ではソウルの主要大学に約4,000～5,000人ぐらいの留学生が在籍しているようです。日本も、早稲田大学はもう5,000人を超えているんですが、ほかの大学ではそれほど多くはない。立教大学には外国人留学生が約1,000人のうち、正規課程の留学生約800人ぐらいなので、留学生数上位30校には入っていないですね。

先日ある国際会議でお会いした韓国の梨花女子大学のコミュニケーション学部の先生の話をして聞いて、驚いたんですが、正規課程の学生の入学定員が60人なのに対し、(定員外の)留学生が60人、それもほぼ中国人だと言ふのです。

留学生 14 万人のうち、正規課程にある留学生が約 9 万人ぐらいなんですけれど、そのうち 7 万人が中国人。さらに、ソウルのある主要大学では、学科の新入生のうち、60 人が国内の学生で、ほぼ同数の中国人留学生が入学している、という現実があるということです。どうしてそういうことが起きているかと聞いたら、これは 1 つの説明ですけれども、ここ 7、8 年ぐらい、学費が凍結されているので、大変経営が苦しいと。外国人留学生の枠は定員外となっているので、積極的な判断として留学生を増やしたということでした。それで成立するんですかと聞いたところ、60 人プラス 60 人は、大変ですけど、特に問題はない。梨花女子大学には大変優秀な中国人が来ているということでした。梨花女子大学は観光のメッカにもなっていて、中国人の観光客がかなり多いこともあって、梨花女子大学に憧れて入ってくる学生が多いのだそうです。もちろんいろいろ問題はあると思うんですけども、60 人入学定員で、60 人、定員外の留学生を受け入れて、それが成立しているということを聞いたときに、まだまだ立教大学は序の口だなと。これからドラスティックな変化というものを予期しながら、いろいろなことを考えないといけないかなと思いました。

大変、そういう意味でも、個人的にも、社会学部の教員としても、国際センター長としても、いろいろ勉強になるシンポジウムでした。ありがとうございました。(拍手)

○小林 黄先生、どうもありがとうございました。

これをもちまして、本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日は長時間にわたり、ご清聴いただきましてありがとうございました。